

## アンケート調査の概要およびリフレッシュ空間における知識創造に必要な空間・環境要素に関する分析

## 大学キャンパスにおける知的創造空間に関する研究 (その2)

正会員 ○大内康平\*1 同 久木宏紀\*2 同 須藤美音\*3  
同 水谷章夫\*4 同 中島靖夫\*1 同 前田明洋\*5

大学 リフレッシュ空間 知識創造 アンケート調査

## 1. はじめに

少子高齢化や国立大学の法人化、今後も加速するであろう大学間の国際競争の激化を考慮すると、これまでの大学キャンパスの延長線上ではなく、「新たな価値を生み出すキャンパス」の形成が必要とされている。オフィスの知的生産性については現在までに多くの先行研究がおこなわれている。しかし、大学における知的生産性の既往研究はまだほとんどないのが現状である。

知的生産性は情報処理、知識処理、知識創造の3つの階層に分かれていると言われている。<sup>文1)</sup> 本研究は、知識創造を行う際に選択される空間および、その空間を構成する空間・環境要素を明らかにすることで、大学キャンパス内における知識創造に必要な空間・環境要素を明らかにすることを目的とした。

知識創造にはリラックスおよびリフレッシュが必要だと言われている。そこで本報は、リフレッシュのシーン別に、空間の選択状況および行動を分析することによってリフレッシュ空間に必要な要素を探る。

## 2 調査概要

## 2.1 アンケート調査概要

本研究を行うにあたり、アンケートを作成した。調査は2012年8月7日(火)~27日(月)の3週間実施した。はじめに某大学の研究室に所属している学生24名を対象として、アンケート調査およびヒアリング調査を行い、研究生の実態や利用する研究空間に関する実態を把握した。また、国土交通省/知的生産性研究委員会で開発されたSAP(Subjective Assessment of Productivity)の質問項目を参考に質問項目を作成した。<sup>文2)</sup>

アンケートの構成を表1に記す。アンケートは、個人の情報及び大学の利用状況、リフレッシュシーン別の選択空間・選択目的、作業内容別の空間の選択及び選択した空間の要素について調べた。

本研究における作業分類は作業内容ではなく、図1のように研究過程の観点から分類した。分類名称を抽象的にし、イメージ図を併せて載せることにより、回答者が自分の状況に置き換え回答出来るようにした。分類名称は「単純作業をする」「情報収集をする」「アイデアを練る・創出する」「研究成果をまとめる」とした。

## 2.2 調査対象

表1に記した8大学の研究室に所属する学部4年生、修士1年生・2年生、博士1年生・2年生・3年生、研究生を対象にし、計198名から回答が得られた。図2に学科別に回答者の割合を示す。理科系の学科が中心であり、建築系の割合が最も高い結果となった。

表1 アンケートの内容

PART	大項目	小項目
1	個人の属性情報	学年・性別・学科・研究種別・大学への登校頻度等
2	所属研究室の情報	研究室の空間構成・学生構成
3	研究区分ごとの空間選択・要素	研究区分による、作業毎の選択空間
4	リフレッシュシーン	リフレッシュシーン毎の空間選択、選択目的

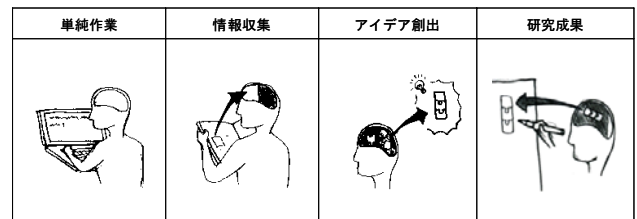


図1 4つの作業内容の分類

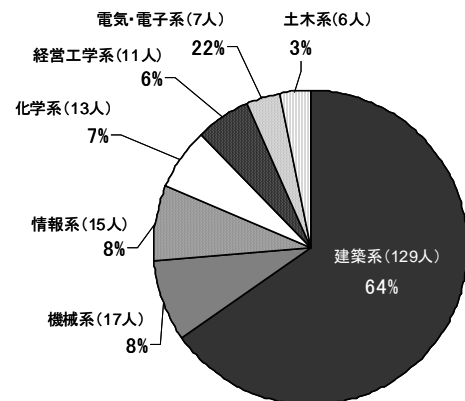


図2 学科別回答者の割合

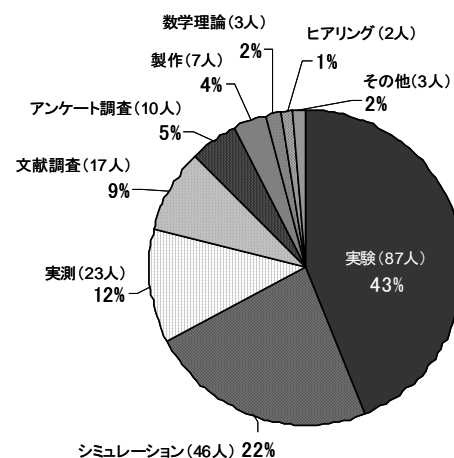


図3 研究区分別回答者の割合

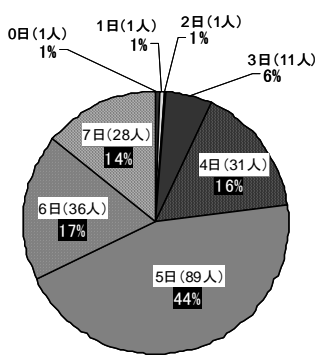


図 4 大学に来る日数

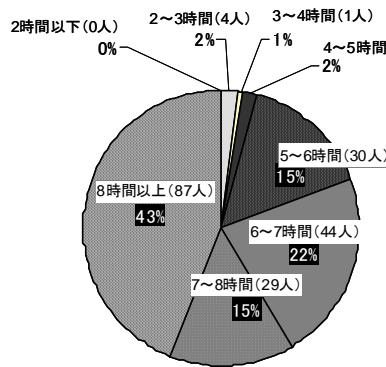


図 5 大学の滞在時間

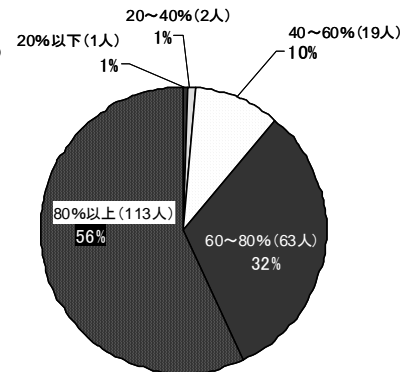


図 6 研究室にいる割合

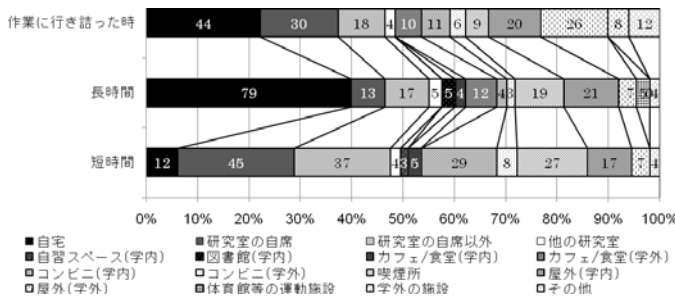


図 7 リフレッシュ空間の選択

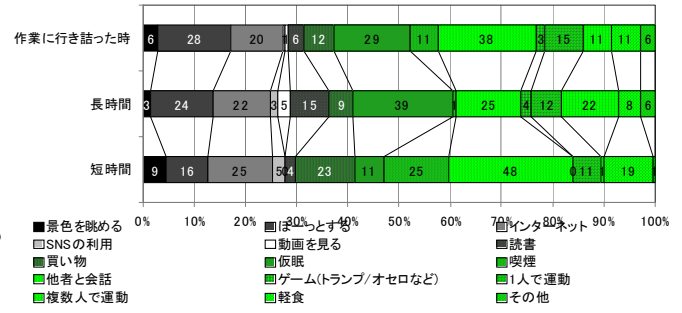


図 8 リフレッシュ空間の選択理由

図 3 に回答者の研究区分別の割合を記す。研究区分とは、回答者の研究の主な方法である。「実験」、「シミュレーション」、「実測」といった自席から離れて作業を行う研究区分の割合が高い結果となった。図 4 に回答者が 1 週間のうち大学に来る日数を示す。1 週間のうち 5 日以上来る学生が全体の 75% を占める結果となった。図 5 に回答者が 1 日あたり大学に滞在する時間を示す。大学での滞在時間は 8 時間以上が全体の約半数を占める結果となった。図 6 に回答者が大学滞在時に研究室にいる割合を示す。80% 以上が全体の半数以上を占める結果となった。

### 3. リフレッシュ空間に関する分析

リフレッシュ状況間の場所の利用変化について調べた。「自宅」でリフレッシュをする回答者は、長時間の際のリフレッシュが最も多く 40% の 79 人、短時間の際のリフレッシュが最も少なく 6% の 12 人であった。自席・自席外を合わせた「自分の研究室」でリフレッシュをする回答者は、短時間の際のリフレッシュが最も多く 41% の 82 人であり、長時間の際のリフレッシュが最も少なく 15% の 30 人であった。「屋外(学内)」でリフレッシュをする回答者は、どの状況下でもほぼ人数に変化は見られなかったが、「屋外(学外)」でリフレッシュをする回答者は「作業に行き詰った時」が最も多くなり、13% の 26 人で他のリフレッシュ時と比べて 3 倍に増えていた。

次に、リフレッシュ状況別の行動の変化について見て

いく。結果を図 7 に示した。

図 8 にリフレッシュ空間の選択理由を示す。どのリフレッシュ時も「他者との会話」をする回答者が多い傾向にある。長時間のリフレッシュ時に増えているのは「動画を見る」、「読書」、「仮眠」、「複数人で運動」などであった。行き詰った時のリフレッシュ時には「ぼーっとする」、「仮眠」など、一度何も考えない状態を作る回答者が多かった。

### 4. まとめ

本研究のまとめは以下のとおりである。

- 1) リフレッシュする状況で、利用する場所が大きく分かれた。特に、行き詰った時には、多様な空間の選択が行われる傾向が強い。
- 2) 利用の際の行動は、長時間の際のリフレッシュでは、「仮眠」や「運動」など時間を要することを行う傾向があり、研究に行き詰った時のリフレッシュでは、「ぼーっとする」や「仮眠」、「他者と会話」など、一度頭を研究から切り替えることをする傾向にあることが分かった。

### 謝辞

アンケート調査にご協力いただいた北九州市立大学、九州大学、慶應義塾大学、名古屋大学、名古屋工業大学、東京大学、東北大学、明治大学、立命館大学の方々に深謝いたします。

### 参考文献

- 1) (財)建築環境・省エネルギー機構, 知的生産性シンポジウム, 補助資料
- 2) (財)建築環境・省エネルギー機構編, 誰でもできるオフィスの知的生産性測定 SAP 入門

\* エフエム・ソリューション  
 \*\* オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン  
 \*\*\* 名古屋工業大学 助教・博士(工学)  
 \*\*\*\* 名古屋工業大学 教授・工学博士  
 \*\*\*\*\* 岡村製作所 オフィス研究所

\* FM Solution corporation  
 \*\* Ove Arup and Partners Japan  
 \*\*\* Assistant Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.  
 \*\*\*\* Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.  
 \*\*\*\*\* Okamura corporation.